

女性の老いと名もなき人々への想像力

原田 寛子

はじめに

Virginia Woolf は *Mrs. Dalloway* (1925) の執筆にあたって日記にこう書き記している。“In this book I have almost too many ideas. I want to give life & death, sanity & insanity; I want to criticise the social system, & to show it at work, at its most intense—...” (Woolf, *Diary* 248)。ウルフの言葉の通り、この小説には戦争や階級、ジェンダーの問題など社会批判的となるテーマが見られるが、なかでも、女性の権利を主張したウルフにとって、ジェンダーの問題は重要である。とりわけ、50歳を超えたヒロインが登場するこの小説を考えると、女性だけでなく女性の「老い」も重要な視点であるだろう。本論では、社会制度批判にアプローチする糸口とウルフの女性の老いに関する見解を、50代のヒロイン、クラリッサ・ダロウェイの老いを通じて探ってみたい。

老いの時間と社会制度

ウルフは執筆中にこの作品のタイトルを「時間 (The Hours)」と記しており、時のあり方はこの小説の重要なテーマの一つである。クラリッサは自分の老いに関して恐怖を覚えたとき、“She [Clarissa] was not old yet. She had just broken into her fifty-second year. Months and months of it were still untouched. June, July, August! Each still remained almost whole,....” (31) と感じる。ここからクラリッサが、何年や何か月という数字で表される時間によって自らの老いを認識していることが分かる。この小説の中で何度も言及される、権威あるビックベンの鐘の音は止まらず流れゆく時間、我々を否応なしに老いや死へ導く不可逆的な時の流れを告げるものであり、また、誰に対しても同じ時間を認識させるその音は、標準化され統一化された制度としての時間を感じさせる。19世紀にイギリスを中心地として作られた世界標準時は、時間を統一し、決められた時間枠で人々の生を管理するものと言える。また、小説内で権威主義者であるブラッドショーや俗物として描かれるヒューとの関連で示される時間の描写は、人々の時間を統一する制度としての時間のイメージを強めている。年齢によって自らの老いを気にするクラリッサもまた、このような数字で表される統一的な制度の時間枠によって自らの老いを認識していると考えられる。

また、文化的な視点からもクラリッサの老いが制度の中にあることが分かる。男女ともに年齢を重ねつつも、女性に対して厳しく評価を下す老いの偏見は繰り返し指摘されているが、肉体にデザインされた出産という機能が終わる世代を過ぎると、女性たちは非生産的とみなされ、その肉体からセクシュアリティが喪失するとみなされる。それにより、女性は社会において不可視化された存在になり、このような女性の老いにまつわるディスコースは社会に浸透しているものである (King xiii)。もう結婚することも、子供を産むこともない年齢に達した自らの肉体が、能力を失って無であり見えない存在のようにクラリッサを感じる場面があるが、その時、クラリッサは、不可視化された自分は、クラリッサという名を持つ本来の自分ではなく、誰かの妻という存在になると感じている。老いる女性の社会的位置づけに対する認識をクラリッサ自身が内包していると考えられる。

クラリッサの病気後、体調を気遣う夫リチャードの提案で二人は寝室を別にしており、屋根裏部屋の狭いベッドで眠っているクラリッサは自分の生活の真ん中には空虚がある、と感じている。ブルートン夫人の昼食会に招かれなかったことをきっかけに、クラリッサは時間を恐れ、自らの老いや残された時間、そして、老いることを考える。若いころ部屋の中心で人々を魅了したものの、50代になった現在は中心から外れ、はなやかな一日は自分の外へ流れ出ていくことを実感するクラリッサは、屋根裏部屋という家の中では中心から外れた場所が自分の居場所になっている。このようなクラリッサにとって、物語の重要な場面となるパーティは「人々を結びつける」「捧げもの」(103)であり、パーティを開き人々の中心に立つホステス役になることは、老いによって中心から周縁に押しやられていくクラリッサの問題を解決することにつながる。

人々をつなぐパーティ：見えない者への想像力

多様な人々がつながるパーティでは、人々を区切る境界線が薄れていく。その中で、クラリッサを超える境界線は、見えるものと見えないものの境界線である。ブラッドショーの患者であり、クラリッサのストーリーに並行して描かれるプロットの中心人物、セプティマスが自殺したという知らせがパーティの最中に伝えられる。自分のパーティに死が入り込んできたことにショックを受けたクラリッサは一人小部屋に閉じこもるが、そこで会ったこともないセプティマスが窓から身を投げ転落した様子に想像を巡らし、クラリッサも邪悪だと感じるブラッドショーの権威的で高圧的な診断によって人生を耐え難いものと感じたのではないかと、実際の状況のように想像する。そして、この青年は日々の生活の中で曇らされていく大切なものを死によって守ったのだと感じ、そ

のことをうれしく思い、また自分がその青年と似ていると感じる。全く知らない青年の死の瞬間、そして、そこに至る経緯、セプティマスの心情に思いを巡らし、コミュニケーションを取るクラリッサの想像力は、見えるものと見えないものの境界線を越える要素を含んでいる。

死は終わりではあるが、死んだ後も誰もが街並みや家や木々の中に、会ったことのない人々の一部として生き残るという発想を持つクラリッサは、見えなくても存在している多くの時間や人々の存在を信じている。見えないどこかで起こったセプティマスという青年の死は、クラリッサの想像力によって、パーティが行われているこの時間に接続され、その死はクラリッサの中に残っていく。アイデンティティを揺るがす老いの問題を抱えたクラリッサは、見える人とのコミュニケーションだけでなく、見知らぬ青年セプティマスの生と死へ想像力を広げ、見えない存在ともコミュニケーションを取ることによって、自らが抱える老いの閉塞的な空間に解放をもたらしたのである。

女性の老いと名もなき人々への想像力

想像力によってセプティマスへの共感を得て気持ちを取り戻すクラリッサを支える要因として、名もなき老いた女性たちの存在が重要になる（松原）。クラリッサが一人小部屋でセプティマスの死へ想像を巡らせていると、隣の家の窓に老婦人がいることに気が付く。静かに自分の生活を送る老婦人の姿は、セプティマスの死を追体験し、人生について思いを巡らせたクラリッサの心を静め、再びパーティへ向かわせる。この老婦人には名前はなく、隣で行われている活気あるパーティとも、セプティマスの死とも関わりなく生きていく。クラリッサはこの光景を魅力的だと思い、この名もなき老婦人の存在、つまり、誰と特定されなくても、セプティマスが死と引き換えに守った魂を、独立した自分の時間と部屋で守り生きていく姿と通じ合うことによって、クラリッサは自らの老いを肯定的にとらえることができたと考えられる。

クラリッサがセプティマスに向けた想像力のように、境界を越え、見えない存在とつながることを可能にする想像力を担うのは名もなき老女の役割であることが示される場面がある。ピーターがロンドンの街で遭遇する一人の浮浪者の老婆は「年齢も性別もない声。大地からほとぼしる太古の泉の声」(69)で意味を持たない歌を歌う。この老婆は、あらゆる時代を通じて、ロンドンのこの舗道が草地、沼地であった時代やマンモスの時代にも、百万年も続く愛の歌を歌ってきた、と説明される。社会から不可視化され、名前はなく一度きりの登場であるが、この老婆はビッグベンの権威ある現在の時間が流れる中で、見えない太古の時間とつながり、現在のロンドンに過去の時空間が重層的に存在していることを思い起こさせるのである。

『ダロウェイ夫人』以外の作品にも、時間の重層性を体現する老女が登場する。ウルフの遺作となった *Between the Acts* (1941) に登場する 70 歳を超えた老女ルーシー・スウィズンは、小説中で、屋敷を案内しながら自分が生まれたベッドを見せ、「他の人たちの中で私たちは生きる。色々なものの中で私たちは生きるのだ」(Woolf, *Acts* 64) と言い、クラリッサと同様の考えを伝えている。また、このような現在という時間を支える重層的な時空間のあり方は、ウルフ自身の関心にも当てはまる。ウルフは *A Room of One's Own* (1929) のなかで、女性作家の軌跡をたどりながら、傑作は一人の力では成し遂げられないこと、その裏には無名の人々も含め多くの人々が存在していることを述べている (Woolf, *Room* 85)。

老いに差し掛かった女性クラリッサが境界を超え、現実には見えない時空間や名もなき人々の存在を浮き彫りにしたことは、ウルフの作品における老女にも通じ、それはまた作者ヴァージニア・ウルフの関心とも共鳴している。ウルフは 59 歳で自ら命を絶ち本格的な老いの時間を経験することがなかったため、ウルフの著作から女性の老いに対する見解を窺うことは困難であるかもしれない。しかし、『ダロウェイ夫人』の出版から 100 年経ち、ウルフがこの小説を通して批判しようとした社会制度がいまだなくならない現代社会において、クラリッサのように想像力をもって境界を越え、名もなき人々や見えない存在へ目を向けることの重要性を、ウルフの描く女性の老いや老女の中に窺うことができるだろう。

引用・参考文献

King, Jeannette. Introduction. *Discourses of Ageing in Fiction and Feminism: The Invisible Woman*. Palgrave, 2013, xi-xvii.

Woolf, Virginia. *Between the Acts*. Oxford UP, 1992.

----. *The Diary of Virginia Woolf, Volume II: 1920-24*, edited by Anne Olivier Bell. Penguin, 1981.

----. *Mrs Dalloway*. Oxford UP, 2000.

----. *A Room of One's Own / Three Guineas*. Oxford UP, 1992.

松原知子 『ダロウェイ夫人』における老女のイメージ 『人文論究』 40 巻 4 号、1991 年、pp. 63-74。